

ご挨拶

我々は長年にわたり、キク科やサトウキビ科、アカサ科の植物を微生物(嫌気性微生物、好気性微生物)により発酵された酵素製剤を調整してきました。

その中でも、サトウキビ科の植物を嫌気性微生物によって発酵された酵素製剤は、一定の効用・効果を幾多の研究機関によって、今、実証されております。

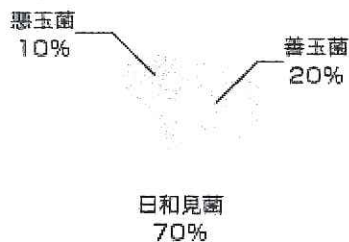
この事は、5年も前から使用者より言われていた事でもあります。

しかしながら、嫌気性微生物のみによって発酵された酵素製剤のみの飲料では、同時もしくは週に数回、好気性微生物によって発酵されたキムチやぬか漬けなどの発酵食品の摂取も必要と言われていました。

この事は、人間の腸内環境を知る事で理解出来ると思います。

腸内細菌には、確か「善玉菌」と「悪玉菌」があるんですよ。

健康な成人の腸内環境バランス



健康な人であれば、善玉菌 20%、悪玉菌 10%のバランスになっています。残りの 70%は「日和見菌」といって、良い働きも悪い働きもする菌種です。善玉菌が優勢だと良い働きをしますが、悪玉菌が優勢になると悪さをします。とはいっても、優柔不断なのは日和見菌だけではなく、善玉菌のなかにも他の菌と作用し合うと悪さをするヤツがいるし、逆に悪玉菌でも、状況次第で良いことをするヤツがいるのです。

人間社会みたいですね。

そう、まるで一つの惑星の生態系です。健康雑誌では、「善玉」「悪玉」とレッテルを貼って、それらの数だけが問題のように言われますが、実態はそれほど単純ではありません。特に、日和見菌の働きはまだ未解明です。

大腸にすんでいる細菌の数って、どれくらいですか。

ざっと「腸内細菌の重さは 1.0～1.5Kg、その種類は 1000 種類以上、その数は 600～1000 兆個」ですね。

私の体重の 1Kg 以上は細菌で出来ている！…「菌も積もれば」というわけか。

オナカのなかで、約 1000 兆個もの細菌が――善玉菌と悪玉菌と日和見菌が――24 時間勢力争いを繰り広げている様子を、想像してみてください。

＜大鵬薬品のサイトより引用＞

ごらんの通りに、腸内環境のバランスが一番大事という事になります。

そこで、長年の研究の末、前田瀧郎先生(85才)によるサボテン科の植物を嫌気性微生物群にて第一次発酵し、次に、好気性微生物群によって 2 次発酵し、同一環境内で、嫌気性微生物群と好気性微生物群を共生した、新酵素製剤サンタマリアの調製に成功しました。

共生＝腸内環境バランスの調整

10 月 5 日に発表されたノーベル生理学・医学賞。寄生虫による感染症に有効な薬を発見した、北里大学・特別栄誉教授の大村智博士(80才)が受賞されました。記者会見で大村博士は、「私の仕事は微生物の力を借りているだけ」と発言されています。

人間の体内(主に腸内)の微生物(細菌、古細菌、真菌、原生生物、ウイルス)は新しく定義された人間の臓器と見なすのが妥当」ということなのですね。

これは「人間と微生物が体内で完全に共生している」という意味でもあります。

どうやら、体内の微生物たちと私たち人間は一体だという科学的見識が今にして根ざそうとしているようです。

これは、最近のメディアから抜粋させていただきますと、以下のようなものです。

人体は「マイクロバイーム」を内蔵する生態系、腸内フローラ、腸内細菌叢の世界世界的に有名な英国の総合科学雑誌ネイチャー誌が、このたび、人の腸内に住む微生物群、マイクロバイームに関する話題を取り上げる特集を2015年2月25日に組んでいる。(中略)研究グループは、マイクロバイームの大部分は腸内に棲み付くが、微生物群は単なる「居候」ではないと説明している。「食べ物の消化」「抗炎症物質の産生」「敵味方を見分けるための免疫システムの教育」など、人間の健康と生存に重要な機能を数多く担う存在になっている。医学や栄養学の世界の考え方が大きく変わりつつある。人間は単独で生きていく生き物ではなく、互いに協調・競合する微生物を内部に秘めた複雑な生態系だと考えられるようになりつつある。というようにですね、

> 人間は単独で生きていく生き物ではなく、互いに協調・競合する微生物を内部に秘めた複雑な生態系

だということが、ようやくわかり始めた。

こういう観点から見ると、たとえば、体内の細菌を殺す「抗生物質」という薬剤が(その歴史的な功績は大いに認めつつも)根本的には、これらの「互いに協調・競合する微生物」を死滅させるものだったという意味で反省するべき点は多いのではないかとも思う次第です。

最近は、「細菌が人類に勝利した日(2015/12/07)」などというような抗生物質耐性菌について書くこともありましたけれど、これらは「登場するべくして登場したのかもしれない」という気がします。「人類は、これ以降は、抗生物質に頼らない生き方をせよ」と。

どのみち、遅かれ早かれ、「すべての抗生物質」が効かなくなることは明白になりつつあります。それはそんなに遠い日ではないと思います。

その時に、人類は、抗生物質のない医学の中での模索をしながら、再び体内の微生物と調和をとれる「普通の生活」に戻ることができるのかもしれないというようなことも思います。